英語科教育とアクティブ・ラーニング

吉住　香織

１．はじめに

本稿はアクティブ・ラーニング（以降は AL と略）をめざして行った英語授業での実践に関する報告である。具体的には学生の英語ペア・インタビュー発表とその指導を紹介し、AL をめざす英語授業のあり方について考える材料を提供したい。

２．実践の概要

発表に取り組んだのは法学部所属の 2 年生で、クラス振り分けの英語テストでは成績が最も低かった学生である。年度当初実施したアンケートでは、自分の英語力に否定的な記述が目立ち、スピーチのような英語での発信活動への興味や経験が乏しかった。現状をふまえて筆者がめざしたのは、協働的な学び合いとペア・インタビュー発表の取り組みを通して、AL につながる主体的な学びのための土台を築くことであった。約 3 ヶ月間の授業概要を簡単に説明する。準備はほぼ毎回 1～3 の 3 段階で進められ、4 の発表に至った。**1.基本文の学習**：場面を伝え、学生から出てきた語句を利用しながら最終的には教師が 1～2 文の基本文にまとめ学生に提示する。約 3 ヶ月間に学んだ基本文と関連表現で合計 55 となり、教師が一覧表にまとめ参考資料として配布した。**2.練習から定着**：口頭練習、ペア・ワーク、ライティング、全体シェアの流れで練習し、基本文の定着を図った **3.発表準備と原稿作り：**原稿作成は学生が自主的に進めることを原則とした。但し 30 分程度、ペアやグループで助言し合う時間を授業で 2 回とった。**4. 発表：**インタビューする側はメモを見るが、受ける側は何も見ずに答える形式で教室正面で実施した。緊張して相手に何度も聞き返す学生もいたが、聞き返しや繋ぎの表現を使って乗り切り、全員が制限時間内に無事インタビュー発表を終えた。

３．振り返りと考察

AL を目指し指導上特に意識した 5 つの視点から本実践を振り返り、考察を加えたい。1 つ目は学生の既存の知識を引き出し、授業への関わりを増やしたことである。教師が全て教え込まず、基本文の単語 1 つでも学生側から引き出すことで、学生の中に自ら手を挙げ発言する姿勢が徐々に育っていくと思う。2 点目は、達成可能なゴールと評価の基準の明示である。活動の先に実生活にも役立つ明確なイメージが見え、さらに評価の観点も示されたからこそ、学生の学習への関わり方は前向きになった、と言える。3 点目として教室外で自主的に学習に取り組むサイクルを意図するようにした。具体的には基本文を小テストにも利用したことである。テスト勉強が発表にも役立つので、自主学習に力が入り結果的にテストの平均点が上がり定着した知識は発表本番で活かされた。4 点目は協働し学び合う機会を作ることである。当初はペア内の声掛けさえためらう学生もいたが、インタビュー発表に向けてペアやグループ協力が必要な様々な課題をこなす機会を数多く作った。学び合う経験を積み重ねていく過程で、例えば相手に届く発声と伝わる発音の重要性に気付き、相手の答え易さや関連質問等についても考えるようになる。Discourse を意識した英文構成について考えた学生がいたことは特筆に値するだろう。最後に自己選択、自己決定をあげたい。量は少なくても自ら考え選択できる余地があれば、自らの学習に責任をもつようになる。自分で選び、決めることが主体的に学ぶ意欲につながっていく、という部分をぜひ大事にしたい。

４．おわりに

本実践では協働的な学びと自主的な取り組みを通して、頑張った成果が見えてくる学生の成功体験を支援し、AL につながる主体的な学びの実現を目指した。現場には様々な制約があるが、学習者の状況をふまえつつ、より効果的な AL の指導のあり方について今後も研究していきたい。